KSKR パンジーだより　No.91　第三種郵便物認可　通巻第 8911 号　2023 年 2 月 13 日発行

KSKR パンジーだより

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

障害者である前に一人の人間です　～一人の人間として尊重されること、子供を産み育てることは当たり前の権利です～

２０２２年１２月、北海道の入所施設で６人の職員が入所者に対し、裸で長時間放置するなどの虐待を繰り返していたことが報道されました。「虐待をするなんて許せない」「虐待をした職員が今も働いているのはおかしい」「仲間に呼びかけて抗議に行こう」と当事者たちと話していた矢先のことです。

１７日、知的障害があるカップルが一緒にくらそうとする場合、不妊処置を条件にしているグループホームがあることを知りました。８組のカップルが不妊処置をしているそうです。いつまでこんなことが起こり続けるのでしょう。「障害者である前に一人の人間です」と訴え続けてきたピープルファーストの理念は、未だに社会の人たちには届いていないのでしょうか？

知的障害者が健常者と同じ一人の人間なら、一人の人間として尊重されること、カップルでくらすこと、子供を産み育てることは、あたりまえの権利だと考えます。支援者が実行しなければならないことは、障害者のあたりまえの権利が守られる社会を作ることだと思います。そして、一人ひとりのくらしを支援することです。

不妊処置をした法人（人たち）は、支援とは何かが分かっているのでしょうか。

１０年以上前のことですが、グループホームで暮らしている女性の知的障害者が出産することになりました。その時は、パンジーの保護者に育児の協力をお願いしました。すると、何人もの保護者が手助けを申し出て「にわかおばあちゃん」になって、育児を手伝ってくれました。その子はすくすくと成長し、今は中学生になりました。そして、グループホームを出て親子でくらしています。今は遠くから見守っていますが、困った時は手伝うつもりです。

パンジーでは当事者の人たちと話し合って、１月に自分たちの思いを法人や北海道庁に伝えに行くことにしました。次号で、皆さんにご報告をしたいと思います。

２０２３年、これまで以上に当事者の思いを皆さんに届けてまいります。よろしくお願いします。

（林　淑美）

ドキュメンタリー

「大空へはばたこう ～自立への挑戦～」を制作して

監督　小川道幸

この企画が動き始めたのは、２０２１年１１月でした。テーマは「入所施設は必要なのか？」。この問いに、これまで多くの専門家や福祉関係者、マスコミが様々な意見を述べてきました。しかし、そこには、知的障害当事者の声は、ほとんどありませんでした。この企画では知的障害者が実際に取材し、そこで感じた生の声を伝えることを大切にしました。

現在、日本には２５００もの入所施設があり、そこにいる知的障害者は、およそ１２万人。施設から地域移行をした人の数は０人の入所施設が７９パーセント、１人が１１．３パーセント（２０１６年～１７年・厚労省調査）。地域移行はほとんど進んでいません。その理由は、「施設での支援が一番適切」「退所者が増えると収入減になる」「地域移行のためのノウハウがない」「地域での居住の場が少ない」など、支援する側の都合が優先され、当事者の思いは無視されています。

この１年、入所施設が作られた歴史、そこで起きている人権無視、海外の状況などを取材してきました。その中で見えてきたのは、入所施設の存在そのものが問題なのだと。多くの入所者が集団でくらすなかで、支援する人たちが優先するのは効率。それは、知的障害者を一人の人間としてみていないことにもつながります。そこにはノーマライゼーションやインクルージョンの考え方がありませんでした。そして、多くの当事者が入所施設を出た後も、心の傷に苦しんでいました。

後半では、入所施設を出た人、入所施設に入らなかった重度の知的障害者の人生を追いました。その中で強く思ったのは、周りの人たちの障害への理解が、その人の人生も変えてしまうことでした。

すべての知的障害者が「大空へはばたき」、自分らしいくらしを実現する。その最初の一歩が入所施設を出ることです。しかし、これは最初の一歩にすぎません。

この企画を進めていく中で、私自身が終わりなき道に踏み出したのだと思いました。次は、何をテーマに発信すべきなのか・・・。

小川道幸（おがわ・みちゆき）
香川県生まれ。TV 番組のディレクターとして世界 110 か国以上を訪れ、自然をテーマに多くの作品を監督。
NHK で「最後のひばり」「満映映画人秘められた戦後」「山本五十六の真実」など様々なジャンルの番組を手掛けている。
NPO「国境なき子どもたち」設立に関わる。

パンジーでは、当事者が職員を面接します

「当事者中心の支援」という言葉を当たり前に聞くようになりました。しかし、知的障害者の多くは、自分の気持ちを理解してもらえていないと感じています。当事者が中心とはどういうことなのでしょうか。

パンジーでは、２０年前から当事者による職員面接が行われています。高松市にあるパンジーＶでは、２０２２年の秋に初めて、職員面接が行われました。面接を受けた職員は４人。面接官はパンジーＶの当事者２人と、大阪のベテラン当事者４人です。

「当事者主体についてどう思いますか？」「あんばい（うまく）支援できてますか？」「ガイドヘルパーをしたことがありますか」。「…ないです」という職員のことばには「それは勉強してもらわなあかん」といった鋭い質問や意見があり、職員は自分の意識が問われました。　　（岩村有希）

…当事者の感想…

・パンジーＶの職員の思いや考えを聞けてよかったし、僕にとってもよい経験ができたと思う。大阪の仲間の人と話ができたことも刺激になりました。次は大阪の職員面接に参加してみたいです。（半山芽吹）

・少し考えるのが難しかったな。職員も緊張したと思うけど、私も緊張しました。パンジーＶの職員の考えていることが少しやけどわかった。自分の思いは、少しは伝えられたかなと思っとる。すごくよい経験ができて自信もついたよ。一緒にがんばっていこうね。（長尾明子）

・真面目にやってほしいな。パンジーが大事にしてる講演活動とかピープルファーストとかしっかりやってもらわなあかん。（山田浩）

・当事者のことをわかってくれる人になってもらいたい。お金のことや、グループホームのこと、くらしの全部を一緒に考えてほしい。自立にむけて考えてくれる人がいちばん大きいな。（梅原義教）

・職員面接ではちゃんと伝えられたと思う。そやけど、「伝えてるけど伝わってんのかな？」と思ったから、これからもみていこうと思う。職員には長く働いてほしい。ちょっとでやめられたら困る。長く働いていたら、パンジーのことがわかってくるはずや。（生田進）

…職員の感想…

朝から緊張が止まらずに、平常心を保つのに必死でした。「次は川股さんです」と呼ばれると、困ったことに心臓がバクバクと早くなり、自分自身に「落ち着け自分！」と何度も言い聞かせていました。面接直前には、とうとう頭が真っ白になり、変な汗が出てくるほど緊張し過ぎていましたが、本番ではあっという間に時間が過ぎていきました。終わって振り返ると、〝面接官からの質問に、自分が思っていることを伝えることができたかな？”〝もっとゆっくり分かりやすく伝えるべきだったかな？”と反省しきり。私たち職員にとって、とても貴重な体験でした。（川股友子）

強度行動障害を持つ人の地域移行を支援する

２０２２年６月、砂川厚生福祉センターに入所するひとりの当事者の地域生活移行支援を開始しました。ＣＹさん、４２歳、強度行動障害を持つ男性です。障害の特性としては、待つことが苦手で、大きな声での要求や確認、物の破損や自傷、他傷行動等があります。

創思苑が主要な受け入れ事業所となり、ＣＹさんのニーズに合った自立生活を実現するプロジェクトを立ち上げました。様々な事業所や行政機関が関わる「自立生活支援ネットワーク」を構築して、支援を共有しながら進めています。

ＣＹさんが初めてパンジーを訪れた時、職員の私とあまり視線を合わせようとせず、慣れない場所で少し緊張している様子がありました。その後、徐々にこちらに意識が向いてきたかと思っていると、大きな声が出始めて、食べ物や飲み物の要求が頻繁にあるようになりました。また、昼休憩にコンビニでの買い物から戻った後、もう１回行きたいという要求が始まり、何度も外へ走って行こうとする行動がありました。

そして、グループホームを初めて訪れた時、要求の際の大きな声に驚いた近隣から苦情が入ってしまい、わずか数時間でパンジーへ移動することになってしまいました。

そんなＣＹさんへの支援の中で意識したことの１つに、「指示をしない」ということがあります。最初から何かをしてもらわなくてはならないと考えるのではなく、横に座って同じ空間を共有しているようなイメージで支援をしました。また作業についても強要はせず、こちらの誘い掛けに対して本人の意欲が見られた時だけ、一緒に取り組む共同作業を大切にしました。問題となるような行動があった時には、して欲しくないことだけを伝えるというリミットを決めて、それ以上のことは指示しないようにしました。

ＣＹさんのパンジーでの体験はこれまで４回を重ね、初めて来た時と比べると、いくつかの変化が現れてきたように思います。最初のうちは、施設からパンジーへ到着してすぐにコンビニのある方向へ走っていく行動がありましたが、少しずつ落ち着いてパンジーに入ることができるようになってきました。毎回スケジュールの確認を一緒にしてきた中で「今日もちゃんと買い物に行ける」という予定の把握と安心がＣＹさんの中に芽生えてきたのではないかと感じています。

また、声が大きく出ている時に、支援者が自分の口元を手で囲って「これくらいの声でお願いします」と小声で応えると、声のボリュームを調節して下げている様子がありました。こちらの声の大きさに合わせるということや、また一方的にではなく、相手の反応を待っている様子も増えてきました。

それでも、まだ泊まりの体験はパンジーのショートステイで行っている現状があります。今後、地域で生活するにあたっては住居内外で大きな声を出してしまうことや、突発的な強い力での行動など、近隣との付き合いを考える上で課題はたくさんあります。ゆっくり少しずつではありますが、ＣＹさんと支援者がお互いを心地よいと感じる関係性を築きながら、安心して地域で暮らせることを目指していきたいと思っています。　（北田　徹）

夢をかなえて

『ヒマラヤの青い空と白い雪』上映会 in 高松

２０２２年１２月２日（金）、高松市にある交流センター、ふらっと仏生山にて『ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの』の上映会を開催しました。

大阪から山岳部メンバーの川西秀機さん・豊田瑛一さん・山田浩さんも参加して、映像を観ながら「泣くな、泣くな」と声を掛けたり笑い合ったりしている様子が会場全体に伝わり、とてもアットホームな雰囲気でした。

上映後は小川監督と山岳部メンバーのトークショーがあり、登山中の秘話や豊田さんと山田さんの掛け合い、川西さんの「ピース！」に盛り上がりました。また、圧巻のヒマラヤの映像を撮影したカメラマンの折笠さんが急遽トークショーに登壇されるハプニングも。小川監督とのやり取りの中で、「障害者という目線ではなく、個性的な人達の集まりだと感じてカメラを回していた」との言葉があり、障害のあるなしに関わらず人と人との繋がりのヒントが隠されているのではないでしょうか！

そして、会場からこんな質問が挙がりました。

「普通の事業所なら、当事者が『ヒマラヤに行きたい』と言ったら止めると思うのですが、なぜ行くことを認めたのですか？」。

それに対して、林理事長は、

「当事者の方は幼い頃から『それはダメ』とか『こうしなさい』と、自分のしたいことに制限を掛けられることが多かったと思います。そんな人たちが語った夢や希望を『何とか叶えてあげたい！』と思ったからです」と語りました。

その言葉を受けて、何度もうなずく人、目頭をハンカチで拭う人、隣の人と言葉を交わす人と反応は様々でしたが、理事長の思いと法人の理念が伝わったことを確信した瞬間でもありました。

今後も香川県での上映会を企画していきますので、皆様のご来場を心よりお待ちしています。感想を一部ご紹介します。

・すごく感動して、勉強になりました。今日は私 1 人しか参加できませんでしたが、他の先生にも学内研修とかで観てもらいたいと思いました。

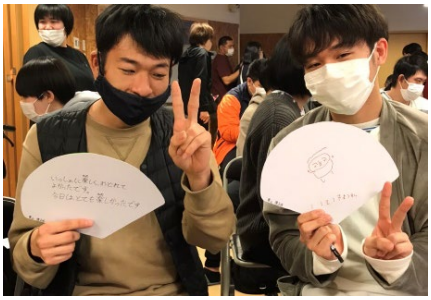
・あらゆる人が共に支え合う社会の構築がどれほど大切なことなのか。感動とともに、自身の生き方についても考えさせられました」　（平福貴行）

各場だより

修学旅行でパンジーへ

パンジーが観光名所に！なんてことに、なるかもしれません(笑)仙台大学付属明星高校の福祉未来創志科の生徒が、修学旅行の一環でパンジーを訪れました。

これまで、高校生たちは知的障害者と接した経験がほとんどないそうです。パンジーの活動を見学し、一緒に買い物に行き、作業を行って交流を深めました。そして、パンジーメディアの『大空へはばたこう～自立への挑戦～』を観てもらいました。



高校生からは「知的障害者と職員の関係が対等なことにびっくりしました。高齢施設で実習の経験がありますが、その時には感じられなかった感覚でした。そういった関係性は、すごく大切だと感じました」「知的障害を持つ人のことを知る機会になりました。一人の人として関わっていく大切さを感じました」など、様々な感想がありました。

最後に、高校生が仙台名物「すずめ踊り」を披露してくれ、みんなで一緒に踊り、盛り上がりました。この後、高校生は大阪や京都を楽しんだそうです。（西野貴善）

餅つきは、力を合わせて！

昨年末、当事者職員約１４０人が集まって餅つきをしました。ついた餅は４臼、もち米にして８升。

パンジーのパン屋から、おいしいあんこが届きました。パンジーメディアからは取材が来ています。助っ人も到着し、いよいよ餅つきスタートです。

パンジーの職員が杵を握り、餅つきスタートかと思いきや、杵を持ったのは、川西秀機さんのお母さんと、パンジーキッチンオーナーの小川さんです。子供のときから餅つきをしてきた２人、杵の扱い、腰の入り方が違います。もち米を一通り押しつぶし、全てを整えたところで、杵を職員に渡し、２人は杵どりに回ります。こちらも、見事な手さばきで、１臼目がつきあがりました。

２人から学び、２臼目からは職員と当事者で餅をつきます。「つきたい人！」と聞くと、最初に杵を持ったのが、当事者の山口さん。「よいしょ！　よいしょ！」の声に合わせて、餅をつきます。山口さんのはじける笑顔を見て、僕はジーンとしました。次々と餅をついていく当事者もみんな楽しそうです。

つきたてのお餅は、やわらかくて、ほんのんり温かく、とてもおいしかったです。みんなも、おいしそうに食べていて、僕の心もじんわり温かくなりました。

餅つきは、**みんなで力を合わせてやるのだ**と小川さんが言っていたことを実感。川西さんのお母さんは「次は、みんなだけでもできるようにね」とのこと。

ぜひ、またやりたいです！

（池辺昌史）

香川 ✈ 北海道

２０２２年１０月末、パンジーＶから、当事者・支援者合わせて１９名が「パンジー旅行 in 北海道」に参加しました。２泊３日の観光グループとピープルファースト大会グループ、３泊４日ピープルファースト大会グループの３つに分かれての行程です。３泊４日のピープルファースト大会グループには、泉保さん、多田さん、浅野さんが参加しました。初めての大会に３人そろってドキドキ。

１日目は全体会、２日目は「元気が出るはなし」の分科会に参加しました。司会者に続き「アイムハッピー！」と元気いっぱいの多田さん。泉保さん、浅野さんはマイクが回ってくると、緊張した表情で立ち上がり、自分の言葉で意見を伝えました。今年のピープルファースト大会は大阪で開催予定です。北海道大会に参加できなかった人たちも「大阪大会には絶対参加したい！」と張り切っています。

パンジーＶに週２回、通所している佐々木さん。Ｖで過ごす２日を「楽しい！」と元気よく伝えてくれます。そんな笑顔が素敵な佐々木さんですが、突然、不治の病気と宣告されました。

私たちはどう寄り添うか話し合いました。出た結論は、「今まで通り、変わらず自然体で接しよう」ということ。

佐々木さんは、パンジーで行く北海道旅行をとても楽しみにしていました。佐々木さんに「北海道で、何を食べてみたいですか？」と尋ねると、最初は「カニがのっとる丼が食べたい」と言っていましたが、「北海道は美味し物がようけ(沢山)あるけん、いろんな物食べてみたいな～」と、どんどん楽しみが増えてきている様子でした。

いよいよ北海道へ。旅行中の佐々木さんは、最初の一歩が思うように前へ出なくて、立ち止まることがありましたが、積極的に歩き、沢山の思い出を作っていました。どんな時でも笑顔を忘れない佐々木さん。食べたかった海鮮丼を前に笑顔でピース！　残念なことにカニは入っていませんでしたが、ウニ、マグロの大トロ、佐々木さんの好物が満載な海鮮丼を食べて、大満足されていました。

お腹が満たされた佐々木さんは、「川股さん、お土産を買わないといかんわ～」と張り切り、「あれもこれも」と思う存分購入していました。

２泊３日の北海道旅行は、佐々木さんにとって、良い刺激になり、元気になったように感じました。旅行の帰りに「何が１番楽しかったですか？」と尋ねると、「全部やでー！」と言い、頭の上で大きな〇を作っていました。佐々木さん、これからも、素敵な笑顔を私たちに見せて下さいね！（川股友子）

KSKR パンジーだより　No.91　第三種郵便物認可　通巻第 8911 号　2023 年 2 月 13 日発行

書き損じハガキ、（未使用）切手を送ってください！

ご家庭や会社などで書き損じのハガキ、スタンプを押していない切手など眠っていませんか？
当事者活動部門ではこれらを集めて活動資金にあてています。ご協力お願いします

田中真由美様　　匿名　２件

パンジーでは、後援会員を募集しています。

賛助会員　１口　1ヵ月　　５００円　　本会員　　１口　1ヵ月　1,０００円
特別会員　１口　1ヵ月　3,０００円　　郵便振替番号 00950-1-300551　ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞﾊｳｽ「パンジー」

上映会を開きませんか？　DVD も好評発売中

知的障害を持つ人たちについて、もっと知ってもらうために、社会を変える力にしていくために
パンジーメディアは、出張上映会を行っています。

『あいむはっぴぃ！と叫びたい　クリエイティブハウス「パンジー」の挑戦』
『ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの』『みんなに伝えたいこと』など多数。

シンポジウムや人権の研修会、学校の授業、事業所の研修など、パンジーメディアの映画を通して、
語り合いや交流の輪が生まれ、知的障害がある人たちへの理解が広がっていくことと思います。

費用・内容は、パンジーメディア　072-968-7151 にお問い合わせください。
メールでもOKです！　pansymedia@pansy-net.or.jp　**（DVD も好評発売中）**

お知らせ

パンジーメディアブックス　　形式：Kindle 版　価格:300 円

『幸せな生き方は知的障害者から学んだ　幸子と美咲と私の物語』　林淑美（著）

私は、知的障害のある子供を育てている人も、自分の人生を楽しんでほしいと思っています。その一歩を踏み出す、小さなきっかけになってほしい。そう思って、この本を書きました。

この本は、私がいつも相談にのっている幸子さんに向けて書いています。同じように知的障害のある子供さんを育てているお母さんたちにも、読んでもらいたいと思っています。

もしかすると、子育てを悩んでいる人にも役に立つかもしれません。

編集人
クリエイティブハウス「パンジー」
東大阪市東鴻池町 2－4－8
TEL:072-963-8818
FAX:072-963-8825

発行人
関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町 2-2
東興ビル4階

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行　定価　１００円